

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 豊島慶子姉

開 会 招 詞 ペテロー2章3-4節

* 賛 美 歌 7:1 (ソングシート)

1. 父の神よ 夜は去りて、新たなる 朝となりぬ。我らは今 御前みまえに出いでて、御名みなをあがむ。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神かみよ、わたしを憐あわれんでください。御慈おんいつくしみをもって。深い御憐ふか おんあわれみをもって、背そむきの罪つみをぬぐい去さつ
 てください。わたしの咎とがをことごとく洗あらい、罪つみから清きよめてください。わたしは咎とがのうちに産うみ落おとされ、
 母ははがわたしを身みごもったときも、わたしは罪つみのうちにあつたのです。わたしを洗つみってください。雪ゆきよりも
 白しろくなるように。神かみよ、わたしの内うちに清きよい心こころを創造そうぞうし、新あたしく確たしかな靈れいをさすずけてください。救すくいの喜よろこび
 を再ふたびわたしに味あじわわせ、自由じゆうの靈れいによよって支さえてください。主きりすよ、わたしの唇くちびるを開ひらいてください。この
 口くちは、あなたさんびの賛うた美うたを歌うたいます。主しゆいイエス・キリストの御名きりすによよって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者なにものをも神かみとしてはならない。
2. あなたは自分じぶんのために刻きざんだ像ぞうを造つくってはならない。それにひれ伏ふしてはなら
ない。それに仕つかえてはならない。
3. あなたは、あなたの神かみ、主しゆの名なを、みだりに唱となえてはならない。主しゆは、
み名なをみだりに唱となえる者ものを、罰ばつしないではおかない。
4. 安息日あんそくにちをおぼえて、これを聖せいとせよ。
5. あなたの父ちちと母ははを敬うやまえ。
6. あなたは殺ころしてはならない。
7. あなたは姦淫かんいんしてはならない。
8. あなたは盗ぬすんではならない。
9. あなたは隣人りんじんについて偽証ぎしやうしてはならない。
10. あなたは隣人りんじんの家いえをむさぼってはならない。隣人りんじんの妻つま、またすべて隣人りんじん

のものをむさぼってはならない。

(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 7:2

2. 万有ばんゆうの主しゆよ、御顔みかお仰あおぐ僕しもべらを強しんくなして、天あまつ国つの尽えきぬ恵たまみを得えさせ給たまえ。

アーメン

共同の祈禱 4 救済史祈禱 ⑥ 新しい契約

わたしたちの主イエス・キリストの父なる神さま、あなたは、時満ちて、御独り子を世に遣わされました。神の人格的御言葉そのものであるキリストは、受肉と公生涯、十字架と復活によって、神のみ旨を十分に啓示し、キリストを証しする聖書を完結させられました。そして、あなたは、イエス・キリストを信じる者に、神の律法をその心に記し、その悪を赦し、その罪に心を留めることはない約束してくださいました。それゆえ、わたしたちは、感謝をもって、委ねられたキリストの御言葉を宣べ伝えつつ、主の再び来られる日を待ち望みます。

(ガラテヤ4、ヨハネ5、エレミヤ31、「聖書」一)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 大会憲法 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 申命記30章11-14節 (旧約聖書329頁)

フィリピ1章3-11節 (新約聖書361頁)

説教・祈禱 「近くにある恵み」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 47:1-2

1. 主よ、われをばとらえたまえ、さらばわが霊は 解き放たれん。わがやいばを くださったまえ、さらばわが仇に 打勝つをえん。

2. わがところは さだかならず、吹く風のごとく たえずかわる。主よ、御手もて ひかせたまえ、さらば直きみち ふみゆくをえん。アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあげさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 65

父、み子、みたまのおおみかみに、ときわにたえせずみさかえあれ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老 (司会・受付 次週：古澤純一長老)

本日 受付 1階：星野房子・藤井牧子執事 2階：那珂信之執事 /ZOOMホスト・録音：番場 駿也

次週 受付 1階：佐藤紀子・若月学執事 2階：森永美保執事 /ZOOMホスト・録音：森永翔 馬

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

フィリピ1:3-11 「近くにある恵み」

元気のもと

皆さんは日ごろの生活のなかで、生きがいというのでしょうか、これをしていけば元気というようなものがあるのでしょうか。秋も深まってきまして出かけるのが楽しい季節ですが、私の場合はなかなか時間がとれないということがありますけれども、広い意味でのアウトドア、ドライブをしたり、山歩きをしたり、といったことで元気になれるかもしれません。その点では息子もそれを受け継いでいます。とはいえ、少し方向性が違っていて、どちらかというところ鉄道が好きです。列車に乗るためなら、朝四時に起きることも厭いません。それは、ともかくとして、私たちキリスト者には、そのような趣味もよいのですが、それとは別に、もう一つ大きな力の源があります。今日は、このパウロの手紙に描かれた彼の生き方を確かめながら、私たちの力の源、聖書ではしばしば「恵み」と呼ばれているその中身について一緒に見ていきたいのです。

新しい視点

それで先ほどお読みしました聖書の中でも3-6節については先週も少しお話をしました。とはいえ改めて確認しますとこのところは、パウロが日常生活において、といたしてもこの時彼はすでに囚われの身であったようで普通に考えるとつらい状況なのですが、それにもかかわらず喜び感謝をしている、その様子を語る所でした。このところの言葉は、パウロが毎日、朝に夕に祈っている、その祈りにおいて感じていることを素直に語ったものだと思います。とりわけ、その祈りの中で、おそらく他の教会の人々のことも祈っていたのでしょうけれども、特にフィリピの教会の人たちのことを思い起こすたびに、毎日の祈りの中で、ああ、感謝だなあ、うれしいなという思いが湧き上がってくる、というのです。それだけで、毎日毎日、力が湧いてくる、祈りの度にうれしくなるというのです。まさに、このパウロの生活にあっては、祈り自体が、力の源となっているのです。そして、これこそが、キリスト者における新しい生き方そのものです。もちろん、私たちには生活の楽しみがあつてよいのです。ただ、それだけではなく、このような信仰者としての喜びの世界がある、という事実をこのパウロの手紙は示しているのです。そして、このフィリピの信徒への手紙は、このような意味で、信仰者を、喜びの世界へと招いていく、そのような手紙なのだといえることができます。ところで、このパウロの感謝と喜び、その理由を語りますが、次の5, 6節です。

パウロの喜び—神の御業は最後まで

まずパウロが言いますのは、フィリピ教会の人たちが、最初の出会いから今に至るまで、福音に与っているという単純な事実です。この与る、ということばは、前回もお話したかもしれませんが、コイノーニアという言葉です。丁度わたしたちが毎回の食事で、自分の分を食べるように、神様が、私たち一人一人に用意してくださった、恵みの取り分、自分の分があつてそれを受け取っていくというイメージです。それはより具体的には、私たちが毎週聞いておりますこの聖書の言葉が、これは自分の言葉だとわかるということです。礼拝で語られる言葉において、もちろん、その日ごとに程度の違いがあつたり、私自身の語り方が悪かつたりして、あんまりそうではないという場合もあるかもしれませんが、とにかく、ああ、聖書の言葉はいいものだ、恵みだな、神様は私に語り掛けてくださっているな、というようにして聴くことができるようにされている、というその事実そのものです。そういう意味で私たちは聖書の言葉へと目が開かれているのです。神様は、そのような具体的な働きかけを、今すでに始めて下さっていて、それは、やがて、いわゆる終末の時、このところの言葉では、キリスト・イエスの時となっていますけれども、世界の完成という希望の時には完全に仕上げて下さる、私たちがもつと嬉しい状態に入れられることになる、というこの見通しをパウロは見ているのです。そして、このようにして、自分もフィリピの人も、このような神様のご支配の中で、よりよい方向に進んでいることがいつでも祈りの中でわかるので喜んでいっているのです。それは、一言で言いますと、神様の国が前進しているという喜びです。

パウロの恵み

ところでパウロはこれに続く7節でこのように書いています。すなわち、フィリピの人たちが神様の恵みの中に入れられて守られていることを喜ぶのは「当然だ」と言うところです。それに続いて、今度

は自分自身のしていることを語り始めます。それが、「監禁されている時も、福音を弁明し立証するとき」とあるところです。実は、このことにつきましては、12節以下にその様子が描かれておりますから、その時改めてお話しすることになります。しかし、かいつまんで言いますと、パウロがこの時捕らわれの身となったことは必ずしもマイナスばかりではなかったというのです。なぜかと言いますと、「弁証し立証する」ということができたからです。どこでと言いますと、牢獄において、また取り調べにおいて、です。この時の裁判とはまた別の時期の話ですが、使徒言行録21章以下では、エルサレムに献金を携えていったパウロが捕らえられて、裁判にかけられていき、長らく拘留され取り調べを受けた様子が描かれています。そこでは、取り調べに来た、地位の高い人たちを前にして、パウロが臆せず語っている様子が描かれています。そのような中でアグリッパという当時のユダヤの王は「短い時間で私を説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」（使徒26：28）といったと記されています。パウロは囚人なのですから、転んでもただでは起きないのです。聖書学者が講義をするようにして、王の前で聖書の話の堂々とやっています。アグリッパ王はその後どうなったかわかりませんが、このようなパウロの言葉によって福音が弁明され、確かなものだと示されて、それでキリスト者になる人が起こされていったのです。こうしてみますと、パウロ自身が囚われたこともまた、福音の前進につながっていたのですが、パウロはそれを喜んでいうことになります。

共にあずかるとは

そしてそのような恵みは、ただパウロのものだけではないというのです。7節はこうなっていました。「共にめぐみに与るもの」。これはフィリピの人たちがパウロの受けた恵みを一緒に受けているということです。「一将なって万骨かる」という言葉があります。一人の名将軍の功績の裏で、多くの名もない兵士のおびただしい死があった、ということでしょう。しかし、教会とはそういうところではないというのです。例えば、ある牧師が、あるいはある優れた特技をもった信徒の方がいて、まわりからすごいと言われている、賞賛されて、ちやほやされている、けれども、その裏で多くの信徒の方たちが光を当てられずにいる、寂しい思いをしている、というようなことは教会ではあってはならない、むしろ一人の人が受けた恵みは、みんなも一緒に与っていく、少なくとも自分はそのように考えている、そして、それが正しいと自分が考えているその証人は神様ご自身だ、というのが、続く8節に言われていることです。「わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証してください。」とある通りです。神様も知っておられる通り、私パウロはフィリピの人たちを愛している、それで私が受けた恵みは、みんなも一緒に恵みに与るものとなっている、と言いたいのです。ただし、そこでもう一つ気になる言葉があります。

キリスト・イエスの愛の心

それは、「キリスト・イエスの愛の心」という言葉です。これは、全くその通り、イエス様の愛です。福音書にはイエス様が群衆を見られて「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」（マルコ6：34、その他）といった言葉があります。パウロは、教会をつなぐのはこのイエス様の愛なのだ、と言いたいのです。自分自身もこの愛にとらえられたと信じているし、フィリピの人たちも同じように、このイエス様の愛にとらえられている、そして、これからもずっとそうやっていく、そのことを確信している、ということ語っていたのが、あの6節の言葉、すなわち、「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。」という言葉になって表れていたのです。そして、このことはこれからも続いていくのです。どんどん実現していくのです。そして、今日の所の9-11節で描かれておりますパウロのとりなしの祈りこそ、教会がこのように歩んでいってほしい、そのことを求め願っていくそのような祈りです。そしてそれは、私たちのこの上福岡教会においても、そのまま当てはまることなのです。

キリストからの賜物

ここでは、例えば「知る力、見抜く力」ということがまず言われます。あるいは10節では「本当に重要なことを見分けられるように」とも祈られています。しかし、そこでもまたはっきりとしていること

があります。それは、本当に重要なことは、知る力、ですとか見抜く力といった能力ではない、ということ。では何が大切なのか、と言いますと、知る力と見抜く力によって、あなた方の愛がますます豊かになること、とある通りです。ここでもまた愛が中心なのです。そして、この愛こそが、本当に重要なことなのです。なぜなら、この愛こそが、私たち教会に集うもの同士を、共にめぐみに与るものとして造り上げていくからです。そのようにして、お互いに与えられた恵みを喜び合い、お互いの苦しみを担い合うそのような群れへとようになっていくときには、教会に一つのしるしが現れてくるだろうとパウロは言うのです。それは、11節にある言葉でわかります。もう一度読んでみます。「イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」義の実とは、言葉通り、神様の前に正しく歩むことにおいて、実りがあるということです。有名なガラテヤ書の言葉にこうあります。「霊の結ぶ実とは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。」

その場で栄光を表す

神さまの御心に沿って歩いていく、愛をもって歩いてゆく時によいものを実らせていく、それも具体的な人間関係の中でよいものを実らせていく。そしてそのようにして、お互いに喜び合う関係があるところでは、「神の栄光と誉れをたたえる」賛美もまた生まれてくるだろう、このようにパウロは、教会の将来について、希望を持って語っているのです。そして、実際にフィリピの人たちも、また、私たちも同じですが、キリストの日に備えて、ますますそのようなものになっていく、そのことと願って祈っているというのです。

近くにある恵み

このように、パウロが語る恵みは、いつか空から降ってくるかもしれないものですとか、どこか遠くへと探しに行かなければならないものではありません。そうではなくて、むしろ、私たちの間で、この教会の現場で、礼拝の中で、また、様々な活動の中で実現していくものです。神様から私たちそれぞれが恵みをいただいて、慰めをいただいて、その事実をお互いに喜び合う、そこに、イエス様の愛が実現します。そして、そのような愛の関係の中に神の国は実現していくのです。

祈り

父なる神さま、尊いみ名を賛美します。あなたは、私たち一人一人をあなたの子として下さり、一つの群れとして下さり、互いに愛し合い、共にめぐみに与るものとなるように集めてくださいますから感謝します。わたしたちが、あなたからいよいよ良いものをいただいて、あなたの栄光をほめたたえ、たとえ私たちの間になお困難と痛み、欠けがあったとしても、あなたに助けられ感謝と喜びをもって歩めますように。この週の歩みもあなたにあって支えられますようお願いいたします。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。